

# 特許紹介

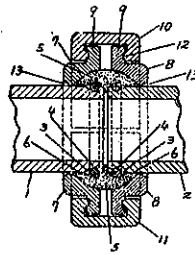
第 28 卷 第 8 號 昭和 17 年 8 月

## 管 接 手

(特許第 150011 號 發明者)  
(特許権者) 伊藤運代司

此の管接手は、地中埋設管等に應用し耐震的にして且締付部の腐蝕せらるゝ事少きを期したものである。圖-1 に見る如く、接続 2 管の各端部に夫々接続部に對し外側縁を緩く傾斜させた環状凹溝 (3) を繞らす。之に硬質環體 (4) を半ば嵌着して其の外周を管體より稍、錐狀に凸出させる。接続部に前記兩凹溝を覆ひ、夫れより廣幅の環状ゴムパッキング (5) を被着し、其の外周に數個に分削したパッキング抑棒 (7) (8) を嵌着してゴムパッキングを強壓せしめた状態で、コ形の拘止棒 (10) (11) を更に嵌着して全體を結合せしめるのである。パッキング抑棒に對しボルトを使用せず、鑄鐵製の拘止棒を使用した故に、地中埋設後締付部の腐蝕を少なからしめ得べく、又環體 (4) が鏝を構成するが故に管相互間の引張りに耐へ得べく、尙環状凹溝に緩傾斜を設置せるが故に、接手部に於て管に若干の屈曲を生じてもパッキングに無理を生ぜしめる事少なからしめ得るであらう。

圖-1.



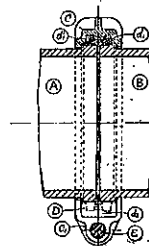
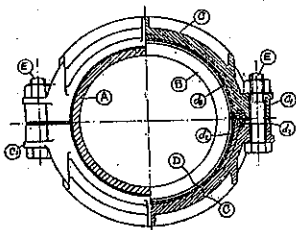
## 管 接 合 装 置 の 改 良

(特許第 150830 號 發明者 (高橋梅吉))  
(特許権者) 興亞ジョイント株式会社

此の管接手は、接合操作が簡易で漏洩絶無、可撓並に耐震的ならしめんが爲に考案したもので、圖-2, 3 は之

圖-2. 正面圖

圖-3. 縦断面圖



を示す。接合すべき兩管 (A) (B) 端を僅少の間隙を保たしめて略ぼ直列に配置し、覆套 (C) の内方に夫々填料 (D) を嵌入し、覆套 (C) の弧狀溝 ( $d_1'$ ) 内には填料 (D) の弧狀 ( $d_1$ ) を溝 ( $d_2'$ ) 内には横條 ( $d_2$ ) を嵌入せし

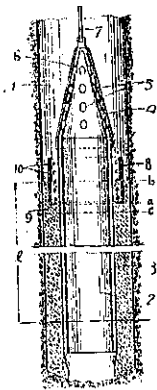
めて、相對する方向から管 (A) (B) の外周に跨らしめて覆蓋し、鏝 ( $c_1$ ) 部を螺釘 (E) を以て緊締するのみで可なるを以て、操作容易且つ迅速で、漏洩を完全に防止するの效果がある。

## 鑿 井 方 法

(特許第 150340 號 發明者)  
(特許権者) 玉木相之助

上端に閉閉し得べき通氣孔 (5) を穿設した頭部 (4) を有する金屬管 (2) を用ひ、之を垂直孔 (1) の中心部に吊下し尖頭通氣孔 (5) を閉塞して其の外周部 (3) にコンクリートを投入する。斯くてコンクリートが硬化するに到れば、掩蓋 (6) を回動して通氣孔 (5) を開放し之を所望の上揚程丈け抜出してから前記工程を繰返すのである (圖-4)。尙打繼目に有孔金屬板 (8) を介せしめる時は、此部分の強度を増大せしめ得る。

圖-4.



此の方法は上記の如き金屬管を使用するが故に、コンクリートの投入に當りては掩蔽せられた傾斜面に沿ひ管の外周に略均等に落下して管内に潜入する事なく、又管の拔出に當りては、豫め金屬管内を大氣と連絡せしめて置くが故に坑内に部分真空を生じて壁面の崩壊破損を招致するが如き處がない。

## セメント混和劑の製造法

(特許第 150477 號 發明者)  
(特許権者) 沖 正二

セメント、石綿よりスレートを製造する際生ずる排泥を鹽酸で處理し中性乃至微酸性溶液となし、之をセメント混和劑として用ひるもので、此の混和劑に依れば硬化を著しく促進し防水力を増加し得べく、從來放棄せられてゐた排泥を利用するが故に安價に製造し得るものである。

## (附) 登 録 實 用 新 案

### 決 濁 式 角 落 し 堰

(登録第 810637 號 公告昭和 16 年第 12688 號公報)  
(考案者 (實用新案権者) 中岡素一)

圖-5, 6. 角落し堰 (5) の一端を臺脚 (3) の溝 (11) に嵌

め、他端を中間支柱(4)に依り支持させる。支柱(4)は控索(6)で引留められ、索を外す事に依り支柱(4)が倒伏せられて堰を簡単に決渇し得るやうにしたもの。

圖-5. 平面圖

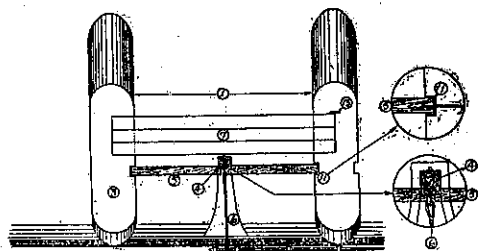
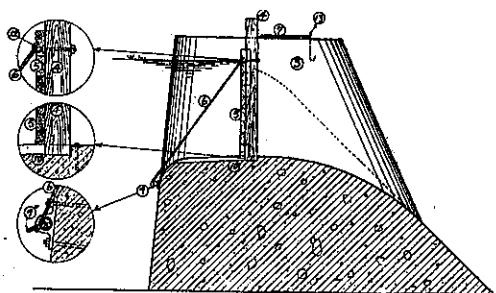


圖-6. 側面圖



地 均 し 機

(登録第 310773 號 公出昭和 16 年第 1700 號公報)  
 (発案者 保原仙太郎 實用新案證書 不二製作所)

テンターゲートに於ける中心軸固定装置

(登録第 311218 號 公出昭和 16 年第 14040 號公報)  
 (発案者 櫻山幸三 實用新案證書 日原製作所)

圖-7, 8. 適當の長さ幅及び厚さを有する平鐵板(1)をピヤ一のコンクリート壁内に埋設するに當り、其の一端(1')はピヤ一のコンクリート垂直壁面に沿ふて之と並行に接近して配置し、之れにゲートの中心軸(2)を支持する框(3)を取り着ける。他端は傾斜狀に曲げ、其の

延長端(1'')には角鐵(4)等の引掛りを設けてコンクリートの密着を良好ならしめる。支持框(3)の反対端は鑿材(6)で平鐵板(1)に連結せしめる。

圖-7. 平面圖

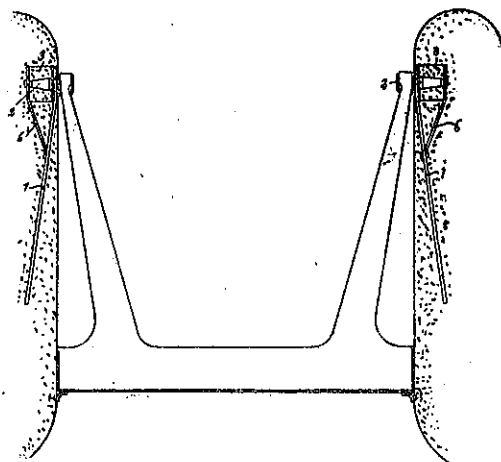
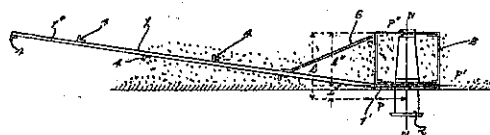


圖-8. 詳細圖



ゲートの水壓荷重は、中心軸に對して垂直方向に働き、固定装置たる力骨は可成  $PP'$  間の距離  $l'$  を小ならしむる程即ち支持力  $P'$  をピヤ一の壁面に接近して作用せしめるやう爲すを可とするものであるが、從來の固定装置は太き建込ボルトを使用する故に、其の太さに妨げられて之をピヤ一の壁面に接近して設け得なかつたのである。然るに本案は厚さを減じて其の代りに相當の軋を保たしめた平鐵板を用ひるが故に、其の平面をピヤ一の壁面に接近して設け得るのみならず、ゲートの水壓荷重に抗する力は或る程度減少せられる。